

2009年2月14日

平安京右京七条一坊十五町跡現地公開資料

所在地 京都市下京区西七条西八反田町

遺跡名 平安京右京七条一坊十五町跡

調査面積 約 400㎡

調査期間 1月13日～2月19日

調査機関 (財)京都市埋蔵文化財研究所 (<http://www.kyoto-arc.or.jp>)

調査経過 今回の調査は、共同住宅新築工事に伴うものです。京都市文化財保護課の試掘調査によって平安時代の遺構が見つかったため調査を実施しました。調査地は、平安京右京七条一坊十五町東の南端にあたります。

南隣の十四町では、七条中学校の校舎建てかえに伴って、昭和55年度と平成9年度に調査が行われています。ここでは、平安時代前期から中期(9世紀初頭から10世紀)にかけての建物や井戸、西櫛笥小路西側溝や柵列などが三時期にわたって見つかっています。また、昭和55年の調査では弥生時代の方形周溝墓や溝も見つかっています。

調査の結果 調査区東側で西櫛笥小路、西側で建物3棟が見つかりました。

西櫛笥小路の東側溝は推定通りの位置にあり、幅0.8m以上、深さ0.05m、延長15m分が見つかりました。平安時代中期前半(10世紀前半)のうちには埋没しているようです。ところが、西側溝は大きく路面部分に張り出し、河川化していました。河川は幅7m前後、深さ0.4mにおよびます。

調査区西側の十五町宅地内では掘立柱建物3棟が見つかりました。建物は二時期にわたって建てられ、最初に南北5間、東西2間の建物2と3が建てられたようです。この2棟は全く同じ規模で、東西に妻を揃えて並んでいます。柱間は桁行2.1m、梁間2.4mです。柱は直径30cmの太さに達するものもあり、その掘形は1辺50～60センチの方形です。次ぎに建物4が造られました、この建物は東西3間、南北2間の東西棟で、柱間は全て2.4mです。柱は直径10cm前後で、その掘形は直径30～40cmです。

調査地の変遷 今回の調査でわかったことを整理すると、まず、平安時代前期(9世紀中頃以前)に建物2と3が建てられました。その頃には西櫛笥小路も本来の道路として機能していたと考えられます。その後、平安時代中期(10世紀)には、西櫛笥小路の西側溝を拡張する形で河川化が始まったと考えられます。同じ頃には、建物2と3も廃絶したと思われ、その後に建物4が建てられました。河川は平安時代後期(11世紀中頃)には埋没したのと考えられますが、その上に中世・近世を通じて水路が踏襲されたようです。

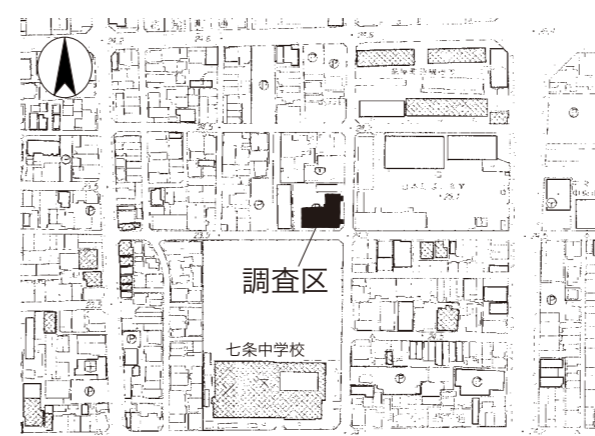


図1 調査位置図



図2 条坊図

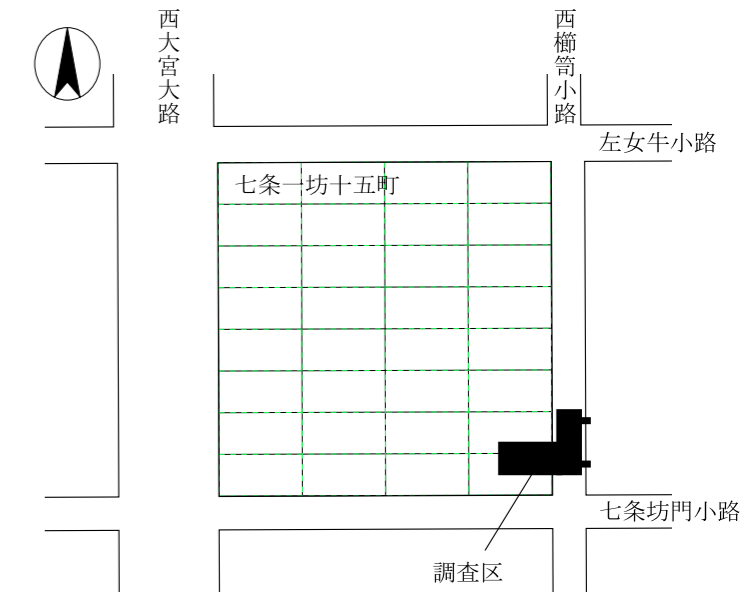


図3 四行八門と調査地

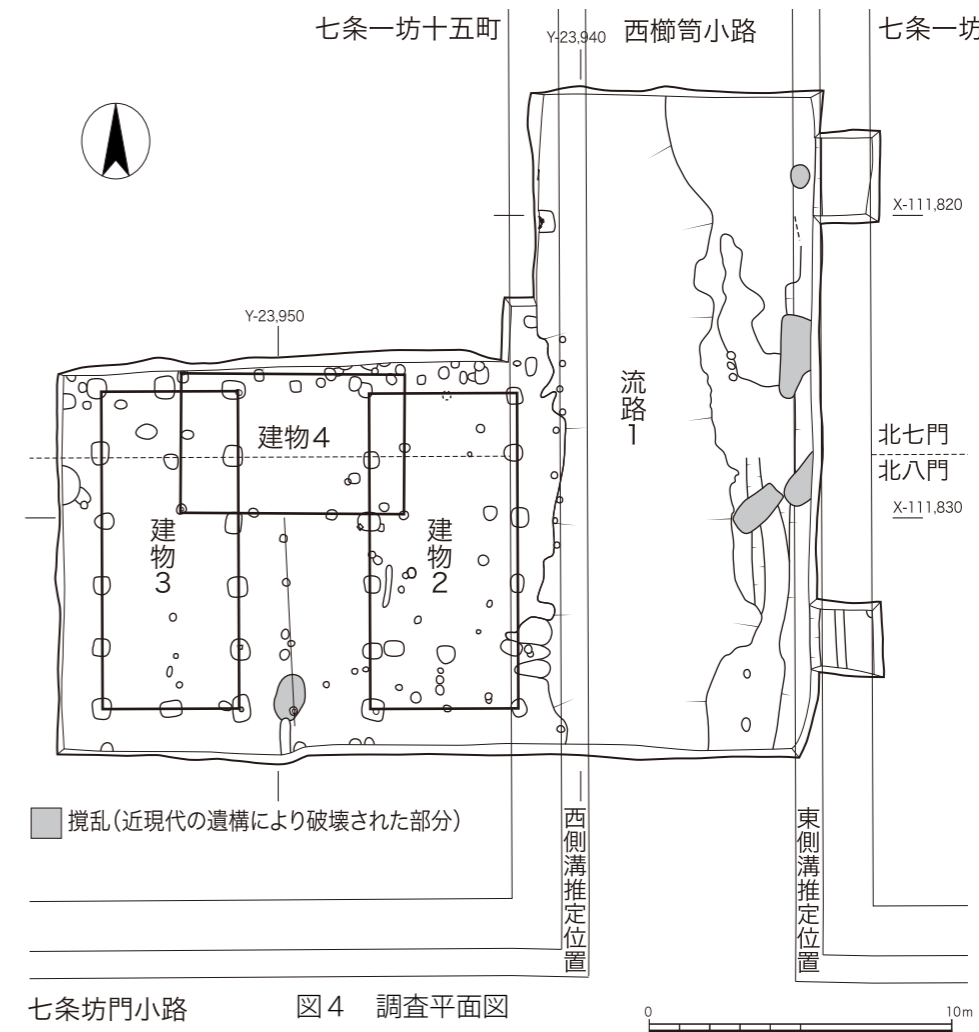


図4 調査平面図